

「霧多布湿原トラストについて」

霧多布湿原トラスト ファンクラブ 並木 敏孝氏

霧多布湿原は、北海道厚岸郡浜中町、釧路と根室のほぼ中間に位置する3168ヘクタールの湿原です。花の湿原と呼ばれ、泥炭形成植物群落が天然記念物に指定されているほか、1993年に「ラムサール条約」に登録、2001年には北海道遺産に選定されています。

霧多布湿原のトラスト活動は、27年前に「霧多布湿原に惚れた会」という名前でスタートしました。現在は「NPO法人霧多布湿原ナショナルトラスト」となり、認定NPOとして損金算入資格を得ています。トラストは湿原周辺の荒れた民有地を買い上げて湿原に戻していくという作業をし、われわれファンクラブは、「守るのは地元、支えるのは都会」という形で、あくまでも地元のトラスト活動を応援するという立場です。

ファンクラブの設立は、トラストの理事が上京する折、法人会員を開拓するために企業を紹介してほしいと頼まれたのがきっかけです。東京の取引先関係の人たちにもそれとなく話をしてみたところ、割と興味のある方がおられたので、それならば組織を作ろうと、「霧多布湿原ファンクラブ」を作ったわけです。われわれは、東京が地元のトラストよりも力を付けて活動の足を引っ張ることになってはいけないという思いから、支部にはなりません。活動資金も、トラストに集まってくるお金には一切触れずに、100%ボランティアで行っています。ファンクラブは、現在、大阪、九州、札幌、鹿児島に広がっていますが、それぞれ独立した形でトラストとは共通の距離で活動しています。

ファンクラブ活動の一つとして、浜中のおいしい食材を集めた「浜中を食べる会」を開催しています。観光ツアーの企画もしており、牧場内をマイクロバスで走ったり、農家を訪ねてラワンギを採ったり、ビジネスとして番屋料理を提供したい、地元で取れたものを販売したいというお客さんたちに協力して試食交流会を行っています。湿原を散策中、花の好きな人のために1時間休憩



並木 敏孝氏

を取るなど、行った人の気持ちを大事にして自由に行程を変えていくツアーは、決して高いところに泊まるわけではないのですが「とてもぜいたくなツアーだった」と言っています。

また、トラスト活動とビジネスの融合をサポートしようと物産展も催しています。トラストの活動を町の人たちが認知してくれないと大きな力にはなりません。地元の主体である農業・酪農を東京でPRし、併せて霧多布湿原のトラスト活動をPRしました。東京のスーパーマーケットで物産展を開催したところ、驚くほどのお客さんが来店し、いろいろなPRができた上、売れ筋商品を定番で置いてくださることになりました。今まで地元でしか売れていなかったものに継続的にファンが付き、それを買ってくれます。そうすると、今までトラストに遠かった地元の人たちも声をかけてくれます。一つの手応えを感じています。

エコツーリズムの一般的定義は、「環境や社会的なもので含めて生態系の維持と保護」、これはトラストがやっていた部分です。そして、「地域の環境や生活や文化を破壊せずに自然や文化に触れ、それらを学ぶことを目的に行う旅行、滞在型観光を目指す」「自然等を現地ですべての方々への感謝の気持ちをみんな持ち続ける」、このあたりがファンクラブの活動です。われわれは、トラストという木に水をまくという作業を通してお手伝いをし、その輪を友達からまたその友達へと広げていく、そういう今までの流れをさらに継続することが大事だと思っています。

「農村型観光施設について」

株式会社ファーム 取締役 久門 圭子 氏

農村型観光施設「日本昭和村」は、里山に囲まれた約84ヘクタールの公園で、岐阜県が建設した公園を株式会社ファームが運営しているという公設民営型の取り組みです。平成15年4月16日にオープンし、今年1月に開園5年8カ月で入園者数500万人を達成しました。「人と人、人と自然の共生」という理念の下、豊かな自然と共生しながら循環型社会を形成してきた昭和30年代の山里の景観を再現し、そのころの生活文化が体験できることをコンセプトとしています。

人間中心の公園づくりということで、三つのことに取り組んでいます。一つ目は「三世代が楽しめる公園づくり」です。この公園は昭和の懐かしい風景を再現しているので、三世代で来られる例が多く、おじいさんやおばあさんが「昔はこうだったよ」とお孫さんにうれしそうに話している風景をよく見かけます。移築された山奥の古い学校で、スタッフが弾くオルガンに合わせて学校唱歌や童謡を歌ったり、春には田植え、茶摘み、夏には星空観察、昆虫採集、秋には稲刈り、村祭り、冬にはもちつきなど、昔の生活の中で営まれていたことを体験することができます。

二つ目は、「高齢者や女性が活躍できる公園づくり」です。スタッフは100%地元雇用で、うち3分の1は60歳以上、約70%が女性です。働ける限りは一緒に仕事をしませんかというスタンスで、棚田の管理、畑での野菜づくり、養蚕などで力を発揮していただき、昭和の演出のためにはスタッフも昭和の語り部ということで、お客さまと一緒に触れ合う場面で活躍していただいています。オープン時にボランティアが組織され、約200名が活動していますが、この方たちも平均年齢が65歳前後で、園内での除草活動や、竹とんぼやお手玉づくりの指導をお願いしています。

三つ目は、「子どもたちが体験を通して遊び学べる公園づくり」ということで、常時20種類以上の体験教室を用意しています。こちらは学校遠足や障害者・高齢者の団体利用が非常に多くなっています。中・高校生の職場研修にも利用され、約1週間から2週間、高齢のスタッフに教わりながら10代の学生たちが研修をするという、非常に貴



久門 圭子氏

重な機会になっています。

当社は今、全国で約15カ所の公園を運営しています。近年はこの公園のように公設民営方式を導入する例が多くなっています。この方式のメリットは、民間は初期投資での負担が少ない形で運営に集中でき、採算を取りながら民間の集客ノウハウなどを最大限活用できることと、サービス面での向上です。公立の公園よりももう少し人間的な部分の、サービスのきめ細かさが期待できます。

公設民営方式の場合、補助金を貰っているケースもあるのですが、この公園は入園料や体験料、レストラン等の収入により、独立採算でやっていることを基本にしています。ですから、岐阜県からの持ち出しはゼロという状態で、民間が集客に努めるといって、非常にいいパターンでの運営形態になっています。入園料収入のみではやっていけませんので、レストランや売店、体験教室からの収入も安定的に確保しなければいけません。地元の産業振興という大前提がありますので、なるべく地元のものを使い、地元でその利益が還元される形での運営を行っています。また、安心・安全な食、子どもたちの食育にもつながるものを提供しようということで無農薬野菜づくりにも取り組んでいます。

最近、若者の勤労意欲の低下、あるいは悲しい事件が多い中、人と人が触れ合ったり、自然や環境への理解を深めていただければと思います。スタッフで手作りの運営を行っています。皆さんもぜひ、お訪ねいただければと思います。

